

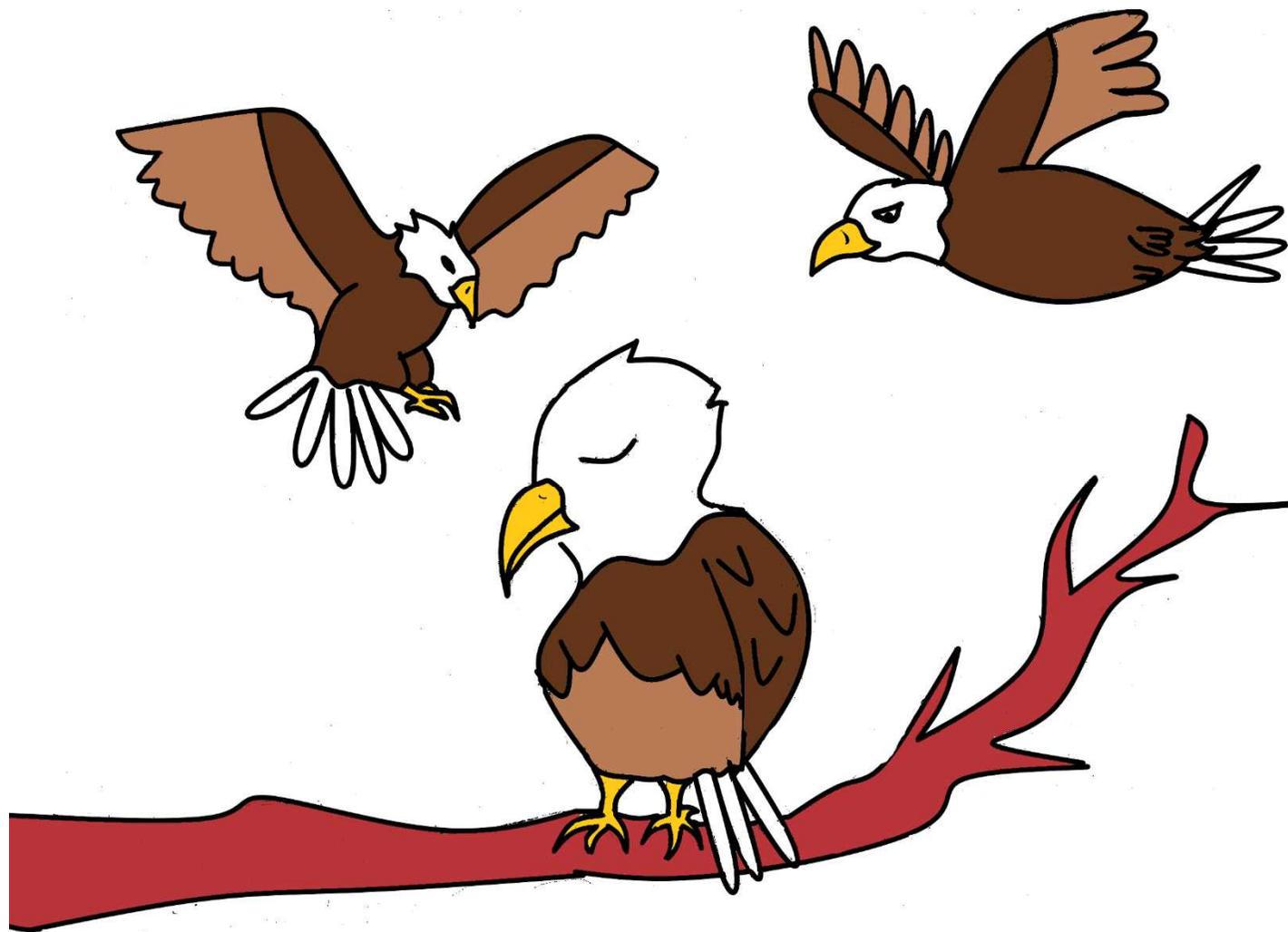
# 大わしの自慢(標準語)



昔むかし、人間がこの地球上で暮らし始めたころ、ある所に、とても大きいわしが居ました。

そのわしは、世界中でおれほど大きいものはいないだろう！といつもいばっていました。

国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト・カラーリング  
:みやかわ みなみ



この大わし、一度羽ばたくと、十里も飛んで行きました。十里といえは、今でいう40キロメートルのことです。

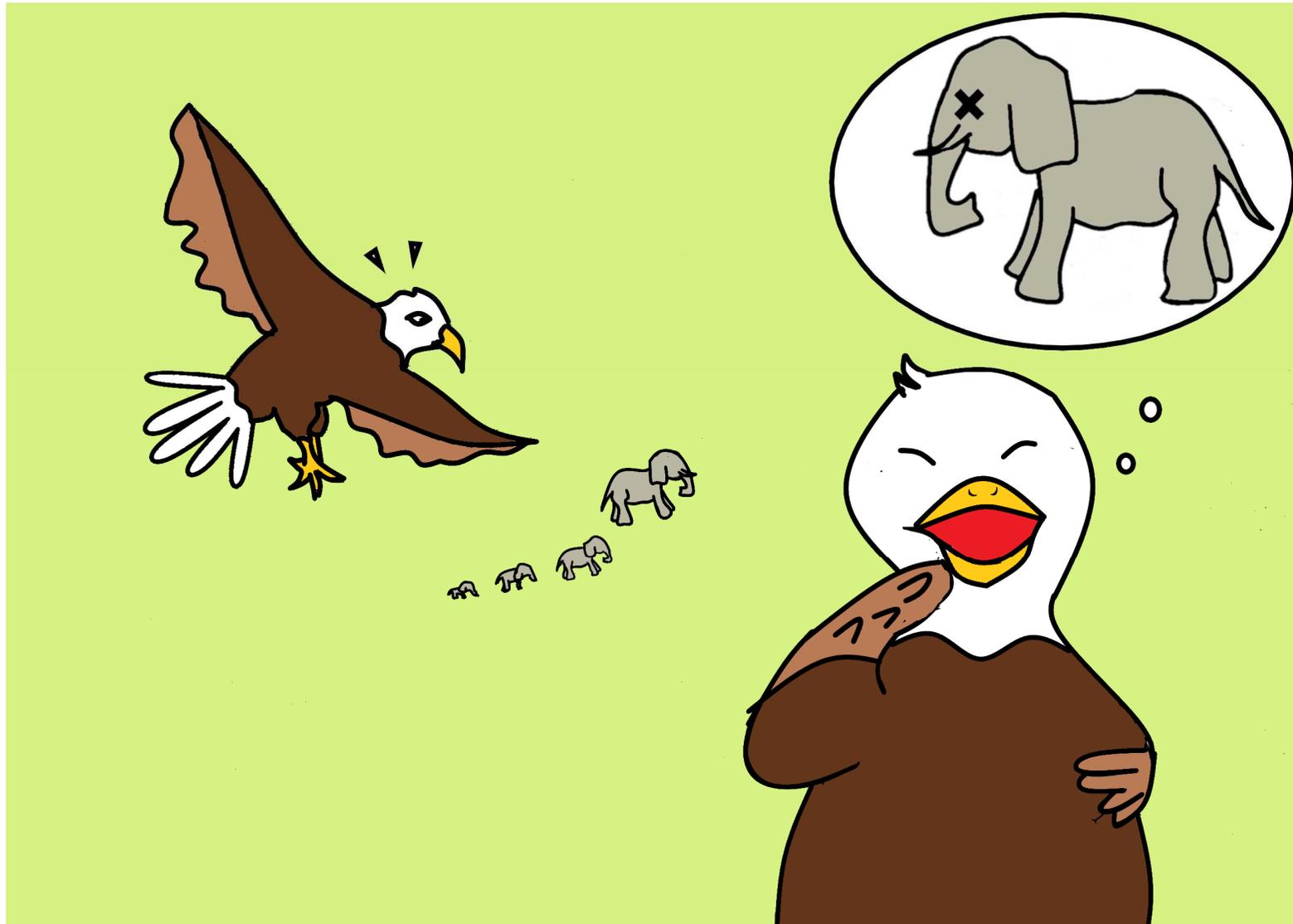
大わしは、あまりにも大きかったので、留まって休むための木や岩をなかなか見つけることができません。

『どこかに、おれが留まれるような木の枝はないものかなあ』とあちこち探しながら飛んでいました。すると、ずーっと向こうにちょうどいい枝を見つけました。

『やれやれ、やっと留まる場所を見つけた。ああ、今夜はここで眠ろうかな』と言って、その日の晩はそこで眠りました。

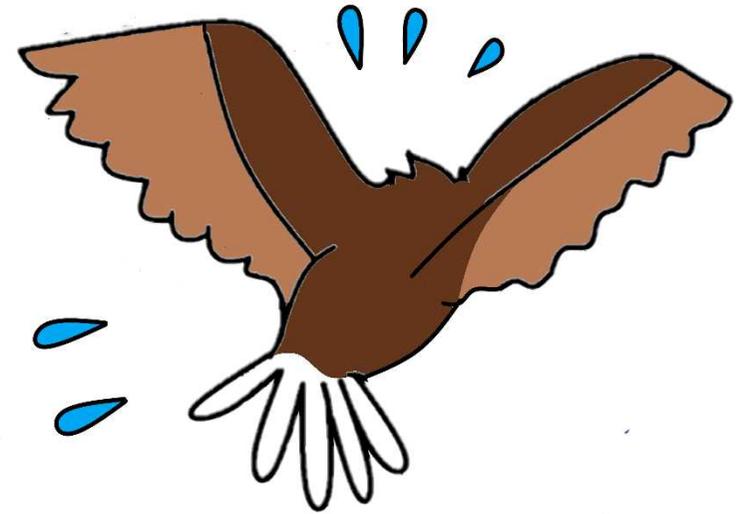
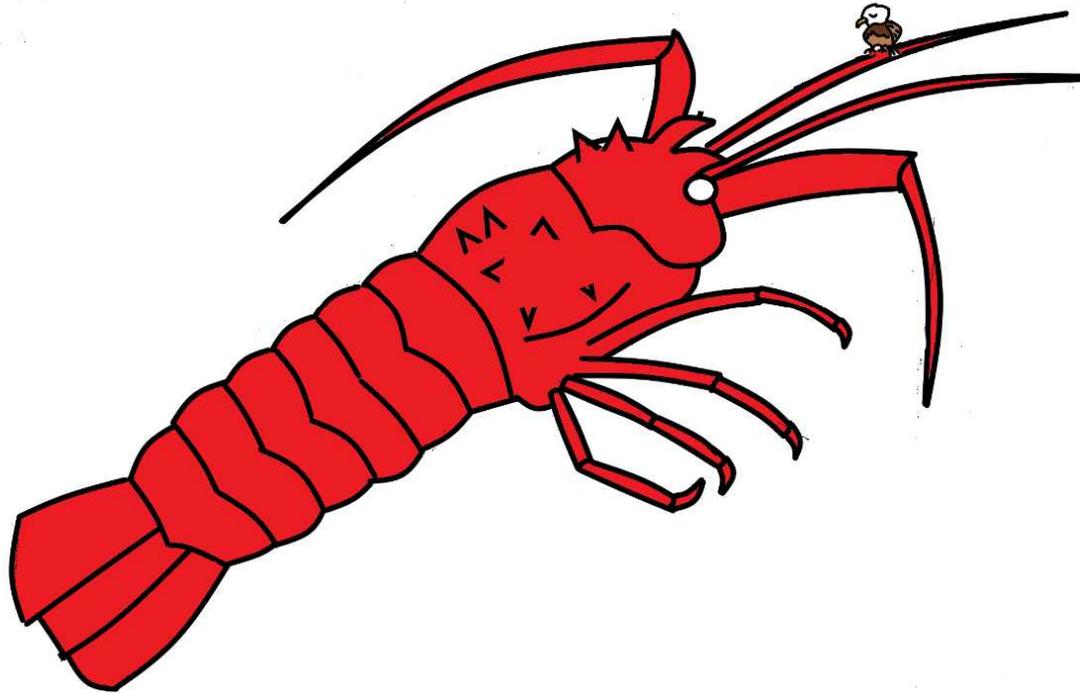
次の朝、またバサバサと羽ばたいて枝から飛び立ち、『ああ、お腹が空いたなあ、何か餌を  
みつけなきゃなあ』と言いながら飛んで行くと、下の方に十頭の獣が走っていました。

わしは、サーッと下りて行って、その中の一頭をパクリと食べました。  
また下りてはパクリ、下りてはパクリと食べて、とうとう群れの全部を食べてしまいました。  
その群れというのは、象の群れでした。



ずーっと飛んで行くと、また、昨日と同じような木の枝を見つけました。

『おれみたいに大きくなると、留まり木を探すのも一苦労だなあ』  
と独り言を言いながら、大わしはその枝に下りて行って留まりました。



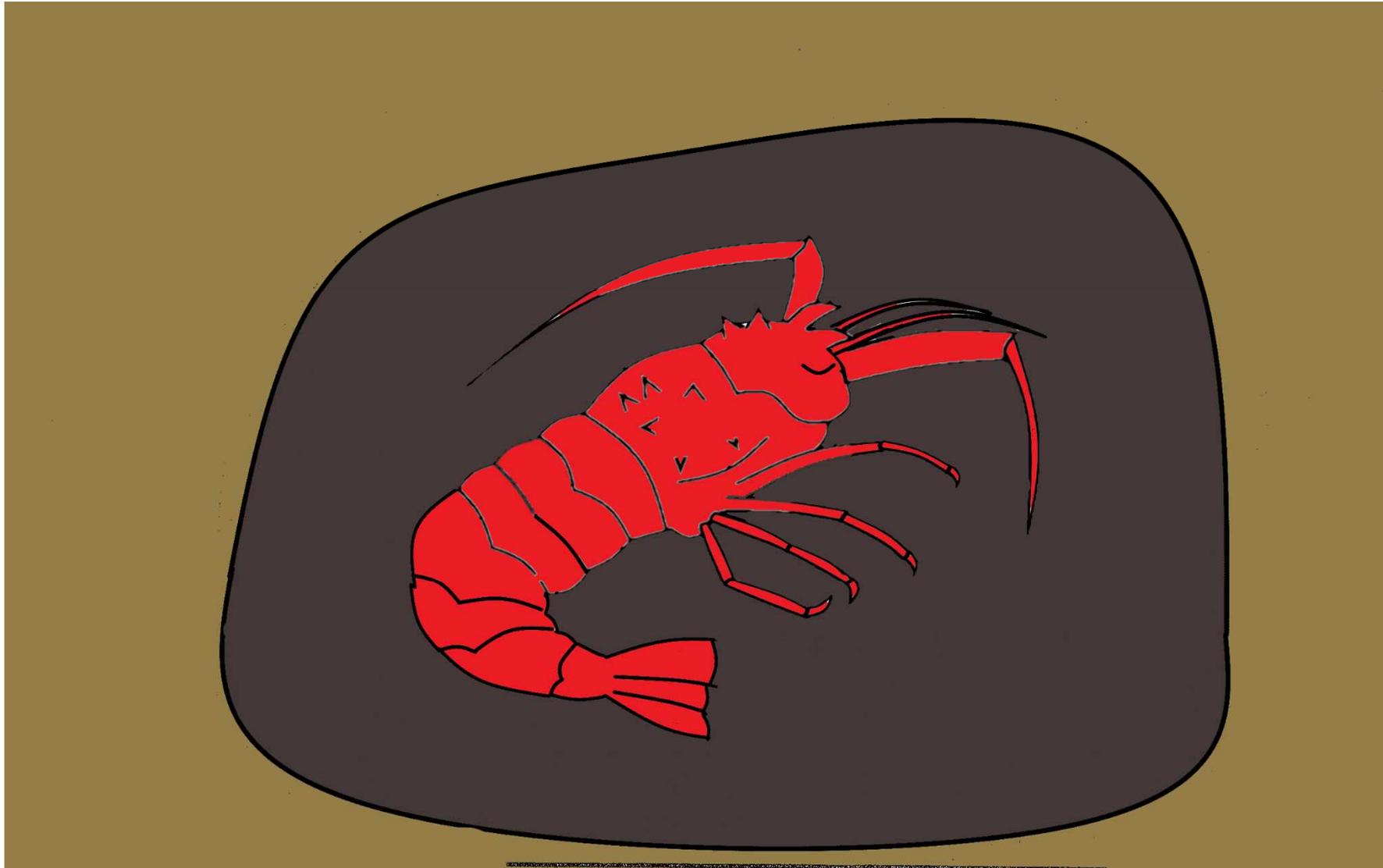
すると、突然、その枝はグラグラと動きだしました。  
そして、下の方から  
『誰だ??昨日は左のヒゲに留まったと思ったら、今日は右のひげに留まって。うるさくて、忙しいやつなんだ』と大きな声がしたので、大わしはビックリ仰天!よく見ると、それはそれは大きなエビで、わしが留まっていたのは、エビのひげでした

さすがのわしも『おれの負けだ』と言って、どこかへ飛んで行ってしまいました。

すると、エビはいばって、『それなら、おれが世界一だな』と、海の上をびよんびよん跳ねて行きました。この大エビは、跳ねると十五里もとぶのだそうです。

あまりに大きいもので、夜になると泊まる穴を探すのに大変でした。

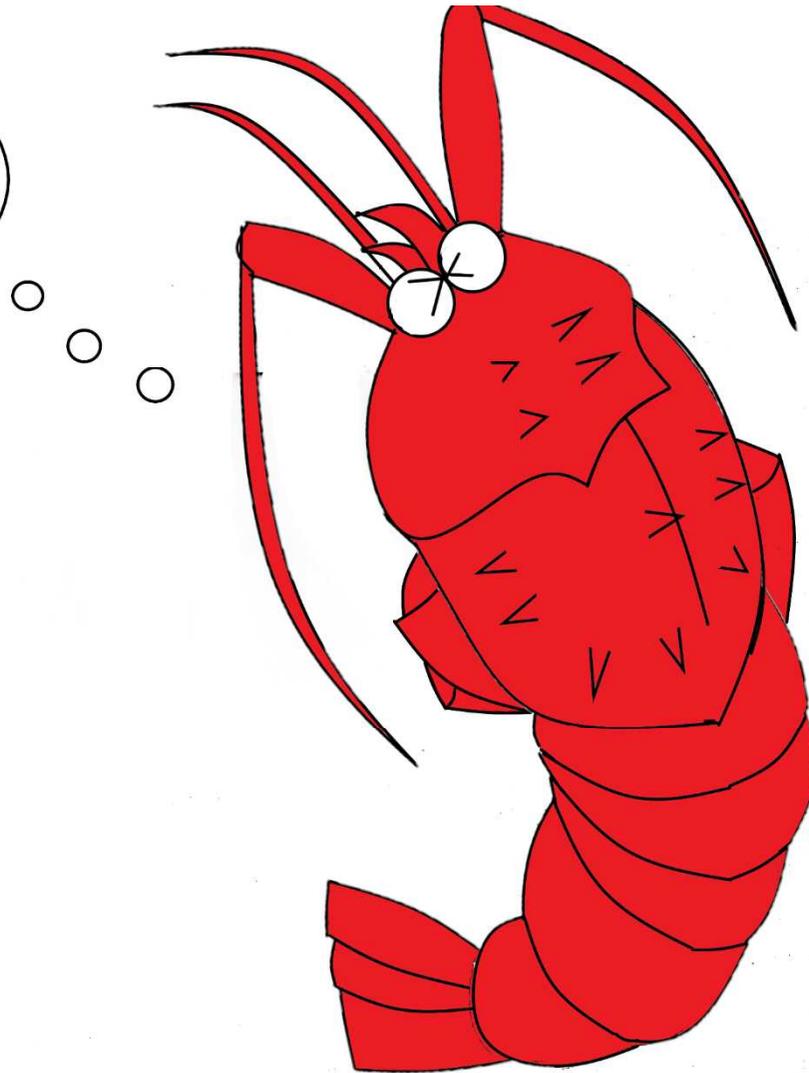
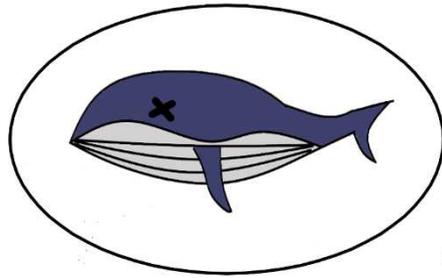
『あら、ここにちょうどいい洞穴がある。泊まるところが見付かって安心した』  
と言って、その晩はそこで眠りました。



次の日、エビは穴から出て、海を上を何百里も跳ねて行きました。  
『ああ、お腹が空いてきたな。何か餌はないかなあ』と言って見ると、波の間を十匹ばかりの魚が泳いでいました。

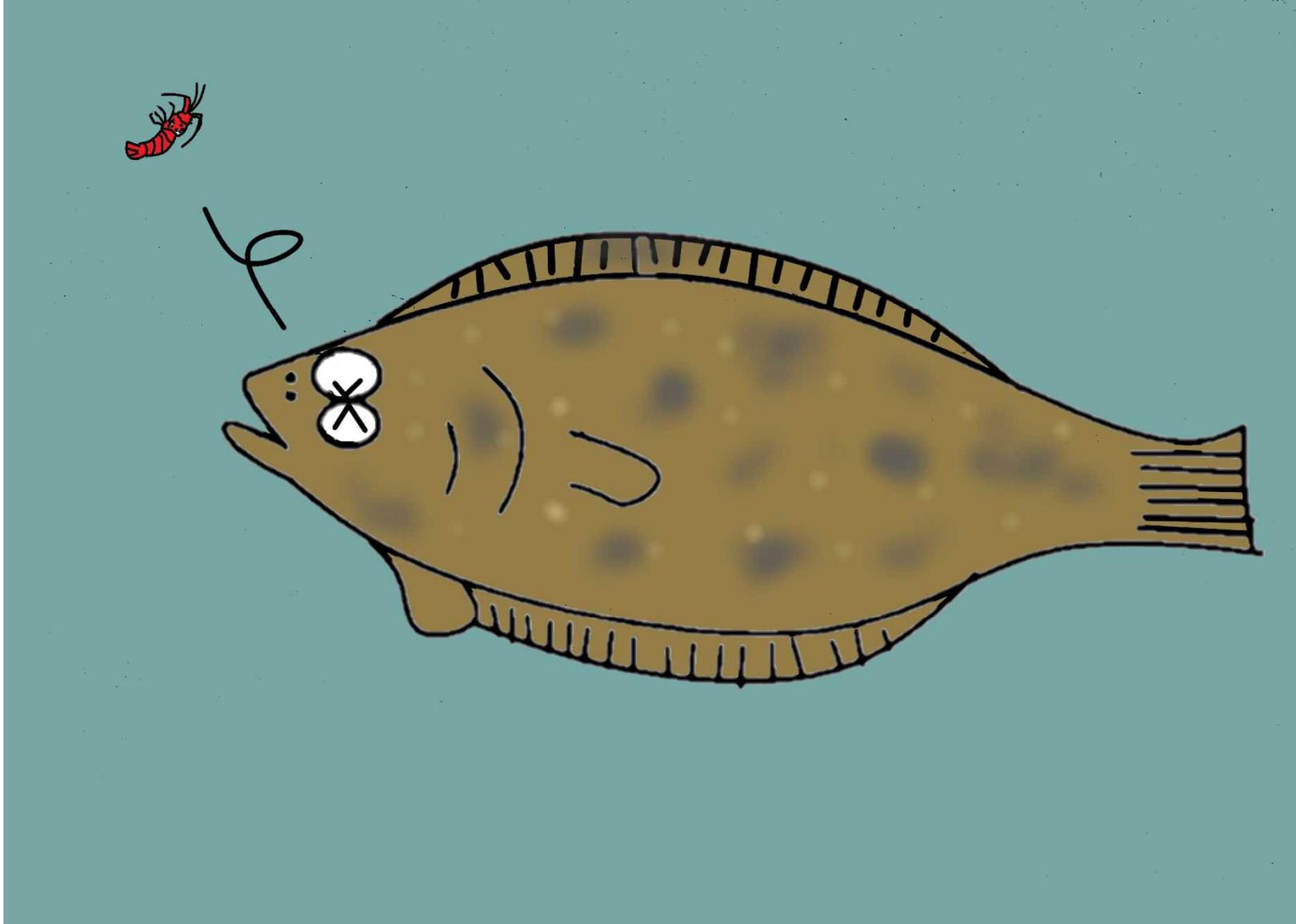
エビは『これはいい塩梅だ』と言って、一匹パクリ、また次もパクリ、パクリ、パクリと十匹全て食べてしまいました。

その魚というのは、鯨の群れでした。  
『ああ、お腹がいっぱいになった。さあ、今晚はどこで眠るのがいいかなあ』と、眠るための穴を探して進みました。

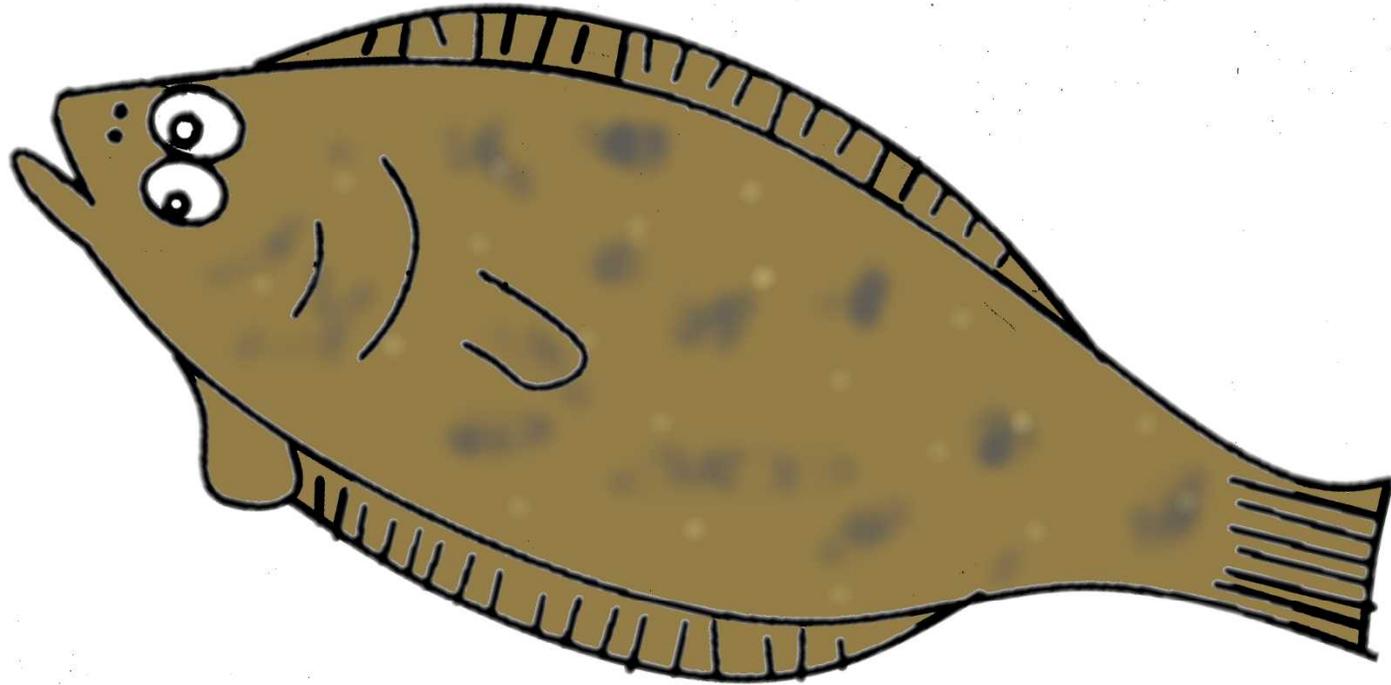


進んで行くと、またしても丁度良い大きさの穴を見つけました。  
『あら、ここの穴は居心地良さそうだ。今夜はここの穴で眠ろうかな』と言って、穴の中へモゾモゾと入って行きました。

すると『誰だ?? 昨晚は右の鼻穴をくすぐったかと思ったら、今日は左の鼻穴にモゾモゾと入って行く奴は!! わあ、くすぐりたい、ハ、ハ、ハ、ハクション!!』と大きなくしゃみをしたので、エビはポーンと飛ばされて、ずーっと向こうの海へバシャンと落ちました。



『ああ、びっくりした。おどろいた。あれは何の穴かなと思っていたら、大きなヒラメの鼻穴だった。世の中にオレより大きい生き物はいないだろうと思っていたけど、世の中は広いものだなあ。あんなに大きいヒラメもいるものなんだなあ』と、おどろいて海の中へもぐって行ってしまいました。



これまた、なんて極端なホラ話だなあ。  
これはただのお話だけれど、人の世の中でもこういう事はあるかもしれない。  
自分が一番だと思っても、その上の人もいれば、さらに上の人もある。  
少くくらい有名になったり、金持ちになっても、腰を低く、いばらないで、暮らしていくのがいいかもしれないよ。  
大地主や、大先生といわれる人でも、案外、ヒラメの鼻穴の中にいるようなものかもしれないね。

おしまい。